
ドラゴンナイト

バッシュャー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴンナイト

【Nコード】

N8498D

【作者名】

バッシャー

【あらすじ】

少年はドラゴンと契約してモンスターとの戦いに身を投じる。

「プロローグ」(前書き)

はじめまして、新米のバッシャーです。駄文かもしれませんがよろしく願います。

「プロローグ」

いつもの日常

それが永遠に続くと思ってた。

ただどいつももの日常は終わりを告げた。

ドラゴン「ゼロ」との出会い、それからすべてが変わった。

そして新たな日常が始まった。

夜空を覆う化け物・モンスター達

「行こう、ゼロ」

「おっ、待ってたぜその言葉」

一人の少年はドラゴンと契約し、戦いへと身を投じていく・・・

「プロローグ」(後書き)

いかかでしたか？これからも書いていく予定です。

第一話、ゼロと共にスタート

その日は目覚めがよかった。窓を開けると快晴の空が広がっていた空を眺めているとインターホンが鳴り響いた。

ピンポーン

「あゝはいはい」

一ノ瀬渚はベッドから降りて、玄関へ向かう

そして一歩手前で足を止める

「おい、ゼロ起きてるか？」

左手に着いているブレスレットに話かける

「ん？」

言葉に反応する「ゼロ」と言うブレスレット、本当の姿はドラゴンだが人間界ではその姿を維持できないため、今はブレスレットになっている

「いいか？ 今、玄関の前に居るのは灯だ、絶対にしゃべるなよ」

「へいへい」とだけゼロは答えた。

渚は玄関のドアを開けた。

「おはよ、渚」

開けた先には灯がいた。長くて赤い髪が風になびいている。

「おはよ、灯今日も学校か、頑張ってくれ」

「あなたも学校でしょ」

「学校は嫌いです」

「そんな言い分通ると思っているんですか？」

しばらく睨み合いが続く

「ああもう、俺の負けです」

渚は負けを認め、自室に戻り制服に着替え、灯の許へと急いだ

「今日もばっちりですね」

灯に褒め言葉をもらい、鞆をもって外に出る

桜並木で構成されている大通り、そこを歩いて渚と灯は登校している

「ねえ、渚」

「何？」

「約束、覚えてる？」

灯の言う約束、渚は幼い頃の記憶がない

そのため約束はおぼえてない

「ごめん、覚えてないや」

「・・・そう」

悲しげな表情をする灯、渚はいつもこの時の対応に困る。渚は灯の肩を軽く叩いて

「ほら、学校に急ごう」

灯は「うん」と頷く

「せっかくだから競争しよ」

「うえっ、ちよっとまって」

渚は慌てて走り始める。次々に人を追い越していく

「おいっ渚」

「なっなんだよ」

誰にもばれないように左腕を押さえる

「モンスターだ」

ゼロが静かに告げた

「どこに？」

声を小さくしてゼロに聞く

「学校の近くの何とか公園」

「わかった、灯ちよっと用事ができた」

「ちよっと！どこ行くの？」

灯の声を無視して公園へ向かう

公園に到着すると、遊具は酷く壊れ樹木は無残に折られている
ここを壊した張本人はバサバサと翼を揺らしている

「ガーゴイルだな、ありゃ」

「行くぞ、ゼロ」

空に浮いているガーゴイルに視線を向ける。そして天高く叫んだ。

「我が刃となりて、白き龍その名はゼロ」

左手のブレスレットが白く輝き、剣に姿変え、渚に握られ白い旋風を巻き起こす。

「よし、いくぜ」

渚は跳躍して、ガーゴイルに斬りかかる。

「はあっ」

渚の剣「ゼロカリバー」とガーゴイルのナタがぶつかる
キーン

「おっ、やるねあのガーゴイル、人語も理解できない低級モンスターの癖に」

「ゼロ、少し黙って」

「へいへい」

壊れた遊具を踏み台にしてもう一度高く跳躍する
迫り来るナタの斬撃を裁き、思いっきり剣を振るう。

「うおおおお」

ザシッ！

渚の一閃がガーゴイルに炸裂する。

「ウギヤヤヤ」

悲鳴のような断末魔をあげて消滅した。

「あちゃー返り血浴びちったよ」

モンスターの血は人間と違い黒い

「それがどうした渚」

「灯に起こられる」

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「アッハッハッ、さすがの渚も灯お嬢には頭が上がらないか」

「笑うなバーカ、ああ見えて灯は怒ると怖いんだぞ」

コツンと剣に姿を変えているゼロを軽く叩く

そして渚は公園を見回す。

無惨に壊されている遊具、折られた樹木

「酷いな」

渚が呟いた。

ゼロも剣からブレスレットに戻り、渚の左手に着いている。

「なあ、ゼロ」

「あん？」

「俺さ、お前と契約してよかったと思ってるよ」

「そうか」

渚は空を見上げ、言葉を続けた。

「だから一緒に世界を守って行こう」

「当たり前だろ、相棒」

渚は立って歩きはじめる。

「灯に怒られる前に帰ろ」

だが二人はこの後重大な事件が起きるとは知る由もない……

〳その日の夕方〵

灯の前で正座している渚

「な〵ぎ〵さ〵また学校サボったわね」

「だからこれには海より深い事情が……」

「今日、晩御飯抜き」

「だから事情があ〵」

ゼロは小さく言った

「やっぱり灯お嬢には頭が上がらないじゃねーか」

第二話、告げる者（前書き）

前回、書き忘れました。これは第一部です。

第二話、告げる者

深夜三時、某ビル屋上で渚は一体のモンスターと対峙していた。
10メートル程の巨漢で岩肌、目は1つそして渚を見下している。

「ゴーレムってこんな強いっけ？」

「さあな」

ズドン！

剣を逆袈裟に構え、ゴーレムの拳を受け止める。

足は地面にめり込んでいる

「こんのお」

剣に力を込め、拳を押し返す。

「ゼロ！」

「おう」

渚は高く跳躍し、剣を斬りつける。

キーン

剣を弾く金属音

「なっ！」

「マジかよ！」

剣はゴーレムを斬るどころか傷さえ付けられない

「ヨ・ワ・イ？」

ゴーレムは渚に拳を炸裂させる。

「がはっ！」

その拳をまともに受けてしまう

「大丈夫か？」

「なっなんとか」

所々から血が流れ初めている

そして立ち上がった時

「やれやれ、見てられないよ」

ゴーレムの後ろから声がした。

渚は青年の姿を捉えた。

「朝倉さん？」

ゴーレムの後ろには青年・朝倉真あさくらしんが立っていた。

「やあ、久しぶり渚君」

真は笑顔を絶やさず渚を見ている

「ダ・レ？」

ゴーレムが真目掛けて拳を向ける

「さあて、エン行くよ」

「了解」

ゴーレムの拳を避け、叫ぶ

「紅蓮の業火、紅き龍その名はエン」

真の着けていた紅いネックレスが輝き、槍に姿を変えた。

「1つ渚君に教えてあげる」

素早い動きでゴーレムを翻弄していく

「ゴーレムは目が弱点だよ」

ズバッ！

紅い槍は容赦なくゴーレムの目を貫く、そして崩れ落ちるゴーレム

「ほらっ」

真は渚に手を差し向ける。

「あっありがとうございます」

手を取って立ち上がる

「いつアメリカから戻ってきたんです？」

真は笑顔で答える

「今日」

「そうですか、ではまた」

渚はその場から去ろうとすると真が肩を掴む

「ちょっと待ってよ」

「嫌です、灯に起こされますから」

「えっまだおこされてるの？」

「はい」

（うわ、渚君言いきったよ）

「だから帰らせて下さい」

渚が振り向いた瞬間、真は渚の腕を握った

「イタッ！」

「ほらやっぱりこの怪我じゃ明日学校なんて無理だよ」
ため息を吐いて言った。

「わかりました、ちょっとだけですよ？眠いですから」
持っていた包帯を巻いて、流れている血を止める
日はいつの間にか昇っていた。

「で、話って何ですか？」

渚が切り出す

「うん、話は全部で二つ」

「一つ目は？」

「1つ目は今度アスカちゃんが来日する」

「なっあのガキが来るの？」

「ガキって君と年1つしか変わらない」

「ガキはガキです。」

真は呆れた表情をしつつ話を続ける

「二つめは魔王の出現が確認された事」

「嵐の予感ですね」

魔王の出現は人間とモンスターの戦争を意味する

当然この戦争に借り出されるのはドラゴンナイトのみ
ドラゴンナイトが全滅すれば戦争に負けたことになる

「じゃ最近モンスターが強いと思ったのは魔王のせい？」

「そうなるね」

「協会の対応は？」

「全面戦争って所だね」

渚は戸惑った。今まで平和だった日常が崩れる

「協会から命令がきてる」

「内容は？」

「アスカちゃんが来日して三日後、魔界に突入する」

「Xデーですね」

「そうだね」と真は答えた。

「もう僕も帰るよ」

時刻は既に午前六時、あと一時間で灯が起こしに来る

「アスカちゃんは今日の夕方にも来日する、だから今のうちに怪我也も治して、灯ちゃんに別れを告げておきな生きて帰れる保証はないから、今回ばかりは」

渚は無言で頷いた。

そしてカウントダウンは始まった

第二話、告げる者（後書き）

今後もキャラを出していきます。

第三話、灯（前書き）

ちよつと展開が速すぎてしまいました。
これから書いていく予定です。

第三話、灯

アスカが来日して一日が経った。二日後には魔界に突入するそして魔王を倒す。

そんな簡単にいくだろうか？戦力には問題ない、だが問題なのはいつ灯にドラゴンナイトである事を明かすか

渚は自室のベッドに横になりながら考えていた。

「どうすればいいだろうーな、ゼロ」

左手のブレスレットに話しかける

「簡単じゃねーかそんなの」

ゼロの言うとおり、明かす事は簡単だ。どのタイミングで明かすか「それより、お前ほんとに覚悟はできてんのか？」

「なにを今さら」

渚は当然のように言っただけだ。

「無理しなくていいんだぜ？」

妙にゼロの言葉が引っかかる

「いや・・・ただ灯との約束とうとう思い出せなかったなって残念そうに呟く渚

「約束ねえーでもお前記憶がないんだろ？」

「ああ」

「だったら思いだせないだろ」

「でも重大なことだったと思うんだけど」

ゼロとの会話の途中インターホンがなった。
ピンポン

「あっ灯かな」

渚は自室を後にして、玄関に向かった。

「渚、見舞いに来たよ」

案の定、灯だったどうやら本当に見舞いのように花やら何やら持ってきてる

「ちようどいい話したいことがある」

取りあえず灯を家に入れる。

「話って何？」

お茶をすすりながら話を切り出す

「実はさ、俺・・・ドラゴンナイトなんだ」

間を開けてから灯が口を開いた。

「ドラゴンナイト？何それ」

一般人なら当然の反応だろう

渚は手短かに説明する。この世にモンスターが居る事、そしてそれを統率する魔王それと戦う者の事を、渚はドラゴンと契約してる事を、

「ゼロ、もういいよしゃべって」

灯に左手を見せる

「よっ！灯お嬢」

「しゃべった？」

灯は驚いていた。それもそうだブレスレットがしゃべったら誰だって驚く

「じゃ、今の話・・・」

「そっ、全部ほんと」

「・・・そう」

「多分、俺の記憶を奪ったのも魔王の仕業だきつと」
しばらく沈黙が続く、それを破ったのは灯

「なんで・・・」

「えっ？」

「何でそんな大事な事黙ってたの」

「そっそれは」

「なんで言ってくれなかったの！」

灯はそのまま渚の家を飛び出した。

「泣かしたなあ」

ゼロは呟いた。

「人事みたいに言うな、追いかけるぞ」

渚も家を出る

公園、灯はそこに居た。公園と言っても遊具はブランコ以外壊されている。先日の戦いで

灯は俯きブランコに揺らされている。

「ここを壊したのも渚の言ってたモンスターなのかな」

「そうよ」

灯の問いに答えるように一人の少女が呟いた。

その少女は銀髪で白いドレスを着ていた。

「さあ迎えに来たわよ」

ゆつくりと灯に近づいていく

「やめろおおお」

その間に剣を構えた渚が割って入る

「渚！」

視線を灯に向ける

「灯、下がって」

「う、うん」

そして視線を正面に戻す

「お前人間じゃないな？」

少女は首を縦に振る。

「お前、名前は？」

少女が不思議そうな表情する

「私の名前、憶えてないの？」

「ああ」

当然のように答える

「じゃあ教えてあげる、私は破壊を司る魔王レイラよ」

それと同時に渚に虚無の弾丸が放たれる。

「くっ！」

剣を逆袈裟に構えて、防ぐ

そして跳躍し、レイラに斬りかかる。

「たあっ！」

「甘いわよ」

レイラは渚の剣を掴み、眼前に指を突きつける

「今は時間がないから」

ドォン！

虚無の弾丸を受け、渚は数十メートル先に吹き飛ばされる。

「渚！」

「さあ、あなたはこっち」

レイラは灯を気絶させ、抱える

「バイバイ、一ノ瀬渚」

そのままレイラは姿を消した。

「いってえー、おいっ灯」

辺りを見回す灯の姿はない

「ゼロ、灯は？」

「連れて行かれたみたいだな」

渚は頭を抑え、大声で叫んだ。

「これじゃ、ドラゴンナイトになった意味ねーじゃねーか」

そして真がやって来る

「遅かったか」

渚も気がつき真に声をかける

「朝倉さん、すみません」

「渚君、灯ちゃんを助ける気ある？」

「えっ？」

いきなりの問い、渚の答えは決まっている

「はい！」

「よし、明日魔界に突入する」

決戦はより早く近づくことになった。

第四話、吹き始める嵐

深夜一時、朝倉真、一ノ瀬渚、アスカの三人は集まった。

「みんな覚悟はいいかい？」

真が再度確認する。渚とアスカは無言で頷く

「じゃあ、いくよ紅蓮の業火、紅き龍その名はエン」

真のネクレスが槍に姿を変える

「はあっ！」

槍を振ると次元が裂け、次第に大きくなっていく

「タイムリミットは24時間、それ以降はこの裂け目は閉じてしまう。だからそれまでに戻ってくるいいね？」

「はい」

「・・・了解」

三人は裂け目に突入する。

魔界に着くのは一瞬だった。だが三人の前にはガーゴイルの群れが立ちふさがる。

「ちっ！やるしか」

渚が剣を召喚しようとするが真が止める

「ここは僕とアスカちゃんがやる、渚くんは早く灯ちゃんの居るところに」

「でも！」

「大丈夫、みんな生きて帰ろう」

「わかりました、アスカも死ぬなよ」

「・・・了解」

渚はガーゴイルの軍勢を無視し、駆け抜ける

「さあ、渚君も行ったしアスカちゃん行くよ？」

「・・・了解、稲妻の如く、我が手に宿れ金色の龍その名はライ」

真は炎を纏った槍を、アスカは電気を纏ったライフルを構える
そして一斉に襲いかかるガーゴイルの軍勢

渚は無事ガーゴイルの軍勢から抜け出し、一直線に走る

「どこだよ、ここ」

荒れ果てた大地が永遠に続く、ただ見えるのは黒い霧に覆われた宮殿
「あそこで間違えないよな？」

ゼロに問いかける

「ああ、絶対あそこに居る」

ゼロも迷いなく答える

そして走り続ける

「待て！」

渚を引き止めるもの、骨剥き出しの体躯そして甲冑

「ここから先はレイラ様の居城だぞ人間」

「そのレイラ様に会いにくんだよ」

「ならあ、ここで死ね！」

ガシン！

2メートルほどある巨剣が渚の前に振り落とされる。

「へっ！やる気あるってか？行くぞゼロ」

「OK」

「我が刃となりて、白き龍その名はゼロ」

白い旋風を巻き起こし、剣が現れる

「我が名はゼダン、名乗れ人間！」

「俺は一ノ瀬渚、ドラゴンナイトだ！」

キン！

ゼダンの巨剣と渚のゼロカリバーがぶつかる

「アスカちゃん、大丈夫？」

「・・・うん」

まだ残るガーゴイルの軍勢、容赦なく二人に襲いかかる

「エン、やるよ」

「いいよ、いいよ」

エンはやる気満々で答える

「アスカちゃん、下がって」

「・・・了解」

槍を構え、槍先に炎を集める

「紅龍」

やがて集まった炎は龍へと姿を変えて軍勢を呑み込む

「ギャヤヤ！」

聞こえてくる断末魔、真は勝利を確信した。
だが、

「嘘だろ！」

今度は倍の軍勢が現れる

「仕方ない、アスカちゃんやれる？」

「・・・うん」

二人は再び軍勢に向かっていく

キーン！

ぶつかる刃と刃

それは渚の剣とゼダンの剣

「てやあああ！」

斬撃の激しい攻防、どちらも一步も引かない

「やるな人間」

「名前で・・・呼べや！」

ガシン！

お互いに退き、そして隙を窺がう

「失礼！渚だな」

「名前で呼ぶようになったか」

渚はここで提案した。

「ゼダン、面倒だ次で決めよう」

ゼダンは迷わず答えを出した

「承知」

そしてお互いに剣を構え、一步前へと踏み出す

最後の
一閃、
勝者は
・
・
・

第四話、吹き始める嵐（後書き）

そろそろ第一部はクライマックスになると思います。
ここでキャラプロフィール書きます。

第一部、主人公

一ノ瀬渚

身長…165

体重…47

年齢…15

本人曰く「自分は欠陥品」

好きな物 なし

嫌いな物、戦い

第五話、決戦へ！

最後の一閃でゼダンとの決着がついた。

「ふっ、私の負けだ・・・くっ」

バタン！

ゼダンの体から流れ出る黒い液体、モンスターの血そして足から消滅していく

「はぁ・・・はぁ・・・」

「大丈夫か？渚」

渚は座り込む、体の所どころ傷ができてる

「めっちゃー痛い」

「おいおい、それじゃあ灯お嬢は救えねーぞ」

「分かってる、でもあのゼダンって奴強かったな」

「まあ、多分上級モンスターなんだろう？」

「多分」

「くっ！さすがにキツイか」

ガーゴイルの軍勢は減る様子がない

真もそろそろ限界、アスカはふらふらだ

「エン、まだ戦える？」

「問題ないよ」

「アスカちゃん、聞こえる？」

真は下の方へ叫ぶ

「・・・聞こえる」

アスカは迎撃しつつ、真の声に答える

「こんなかに統率してる奴が居ると思う、僕とエンがそいつを見つけてだす！見つけ出したら狙撃して」

「・・・了解」

アスカは承諾し、迎撃を続ける

「行くよ、エン」

「いいよ」

紅い炎を纏い真は軍勢の中へ飛び込んで行く
次々と炎の中で焼かれガーゴイルは落下していく
そして軍勢の中心に一体だけ普通のガーゴイルと違うモンスターが
居た。

「ここだ！アスカちゃん」

真は中心にいるモンスターに槍を向け、居場所を知らせる

「・・・了解、ライ準備」

「了解」

アスカの構えるライフルのスコープを中心に標準を合わせる

銃口に電気は集まり、弾丸を生み出して行く

「・・・電龍バレット」

黄色の閃光がガーゴイルの軍勢の中心を貫く、統率していたモンスターは消滅しガーゴイルの軍勢が消えていく

「勝った」

今度こそ真は勝利を確信した。

「着いた」

渚の目の前にそびえ立つ黒い霧に覆われた宮殿

人気もなければモンスターの気配も感じられない

「覚悟はいいな？」

ゼロの最後の確認、渚は迷わず言った。

「灯は絶対助ける」

そしてドアを開く

中はとても暗いそして一歩ずつ歩いていく

人気もモンスターの気配もない

そして少し歩いたところで大広間に着いた、それと同時に渚が照明
に照らされる

「いらっしゃい一ノ瀬渚」

レイラの声、後ろに振り向くとレイラが立っていた
渚はすぐさま剣・ゼロカリバーを構える

「灯はどこだ！」

渚の声は響いた。だがレイラは動じなかった。そしてゆっくりと渚の後ろを指差す

「えっ！」

渚は再び、振り返る。確かに一人の人間が居た
真紅のドレスに身を包む一人の少女、間違いなく灯だった。

「灯！助けに来たぞ！」

渚が叫ぶも反応なし、まるで人形のように

「無駄よ、その子の魂は私が持ってるもの」

レイラの非情な言葉、渚の怒りが頂点に達した。

「うおおおお！」

レイラとの間合いを一気に詰め、斬りかかる
キーン

レイラも黒い光の剣で応戦する

「さあ、私を倒して御覧なさい」

「たああああ！」

渚の斬撃も軽くあしらうレイラ

「そんなじゃ、私を倒せないわよ」

余裕な笑みを浮かべている

（どうやって倒す？）

渚は思考をフル回転させる。どんな些細な事でもいい、勝機を掴むには？

「てやああああ！」

渚の一振り、だがレイラの方が早かった。渚の剣を弾き、そして突き刺す。狙いは渚の足

「うわあああ！」

悲鳴を上げる、右足がレイラの剣で貫かれた。

「どう？痛いでしょ？人間てのはもろいのよね」

レイラは剣を床に突き刺す。そしてゆっくり渚に近づいていく

「それに比べて私たちは下等な人間と違って頑丈だし」

レイラが渚のゼロカリバーを取って、渚の髪を掴む

「殺してあげようか？相棒で」

剣の刃が渚の首に近づいていく、まだ足の痛みが残る

「ゼロ！」

渚が叫ぶとレイラの持っていた剣が渚の左手にブレスレットとして戻った。

「そんな事もできるんだ」

まだ余裕の笑みを浮かべるレイラ

「渚、戦えるか？」

「やるしかない」

渚は右足を押させつつ、立ち上がる

「我が刃となりて、白き龍その名はゼロ」

ゼロをもう一度剣に変え、構える

「へえーじゃあラストバトル開始ね」

レイラも剣を構える

そして互いに距離を詰める。これが最後の戦い

第六話、ラストバトル

「はあああっ！」

渚の斬撃の猛攻、それをレイラは無言で全部受け止める

「ほらほら、そんなんじゃないわよ」

「うるせえー、渚もっと力込めろ」

「分かってる」

キーン！

再び刃同士がぶつかる。

「くっ！」

「ほらどうしたの？」

余裕の笑みを浮かべるレイラ、それに対し渚は右足の苦痛も感じている。

「はあっ！」

レイラの剣を弾いて、一度後退する。

「距離を離したって無駄よ」

レイラの指先から放たれる虚無の弾丸
ドッカーン！

「うわっ！」

放たれた弾丸の爆風を受けて、吹き飛んでしまう渚

「ほら、言ったでしょ？ 無駄だって」

爆発が原因で辺り一面が煙に包まれる

そして瞬時に渚はレイラの後ろに回り込み斬りかかる。

「何！」

レイラは間一髪それを避けた。だが左肩から血が流れ始める。
だが渚はさらなる追撃を加える

「少しはやるじゃない」

左肩を押さえながらレイラが言った。

「へっ、俺らが本気出せばこんなの序の口よ」

ゼロは負けないとばかりに叫ぶ

「ゼロ、調子に乗るなまだ油断できない」

しっかりと剣を握り構える、渚

「いいわ、これからゲームをしましょ」

「ゲーム？」

「そ、ゲーム」

余裕の笑みを浮かべたまま体勢を立て直す。

「ルールは簡単、この水晶を私から奪ったらあのお嬢ちゃん助けられる、どう？」

レイラは左手から水晶を出現した。そして渚はそれを指指して言った。

「それは何だ？」

「知りたい？」

相変わらず余裕の笑みを浮かべるレイラ

「いいわ、教えてあげるこれはねあのお嬢ちゃんの魂よ」

冷酷に告げるレイラ、渚は容赦なく斬りかかる

キーン！

「そんなでゲームなんかしてたまるか」

「あら、残念♪」

刃がぶつかり押し合いになる。

「こんのお！」

渚は押し切り、浅くだがレイラの腹部を斬った。

「はぁ・・・はぁ・・・」

「ほら、渚疲れてんじゃねーよ」

「分かってる、ゼロ」

渚は再び剣を構える、剣は少し黒く染まっている

「そろそろ本気出さないと駄目かしら」

さすがにレイラも笑みを維持できなくなり始めた。

そして一瞬で十数の虚無の弾丸が生み出され

「行きなさい！」

レイラの合図で一斉に渚に襲い掛かる
ズドン！ズドン！ズドン！

容赦なく襲い掛かる虚無の弾丸、宮殿内は半壊し煙が立ち曇る
「これで確実に死んだわね」

レイラは勝利を確信した。

だが・・・

煙の中からレイラの右腕を掴む者、渚だ

「どうして？」

レイラは動揺した。渚はレイラの左手を斬り落とす。
落ちる水晶を渚は掴む

「どうしてそこまでして守りたいの？」

レイラは左手を押さえて言った。

渚は意識が朦朧とする中、ゆっくりと灯に近づいて行く

「あ・・・灯今助ける」

水晶を灯にあてる。水晶は灯の中へ入っていく

「う・・・うう」

「灯！灯！」

渚は灯の肩を掴んで揺する。灯はゆっくり目を開ける

「渚どうしたのそんなボロボロになって、あれどうしてこんな格好？」

いまいち理解できてないようだが灯は目を覚ました。

「よかった、早く行くよ」

渚は灯の手を取って走り始める

「ちょっとまって」

そして宮殿から脱出し、裂け目に所に向かう

「朝倉さん！アスカ！」

裂け目の近くでは戦いを終えた二人が待っていた。

「助けてこれたんだね」

「はい！」

「じゃあ、帰ろう」

四人は裂け目に入ろうとした時、渚は三人の背中を押した。

「渚、早く」

灯が叫ぶも渚は首を横に振り拒絶する

「ごめん、決着つけなきゃ」

渚は後ろに振り向いた

「約束・・・守ってね」

その言葉を最後に裂け目が閉じた。

「これでよかったのか？」

ゼロは渚に聞いたが渚の返事は堂々したものだった。

「レイラとの決着を着けに行こう」

渚は再び宮殿へ向かった

第六話、ラストバトル（後書き）

次で第一部が終わると思います。
第二部から主人公が変わります。
渚と魔王レイラの戦いの行方は？

第七話、決着（前書き）

これが第一部最終話です。どうぞ見てください

第七話、決着

本の世界へ帰って来た渚を除く三人、なぜかぎこちない

「朝倉さん」

沈黙を破った灯、悲しげな表情をしていた。

「なんだい？」

「渚・・・帰って来ますよね？」

「うん、きつと」

真は嘘をついた。アスカは嘘だと言う事が分かっていた。だから終始無言でいた。

「ほんとによかったのか？」

渚は宮殿に向かっていている。ゼロがこの質問をしたのは三回目

渚の答えは「よかった」ばかり

そして半壊した宮殿に入る

中央で一人たたずむレイラ、渚は一步步近づいて行く

「どうしてあなたはそこまでして戦えるの？」

レイラの問い、だが渚はすぐに答えた。

「かけがえないものの為に守り抜いて見せたいのさ」

「守りたい？ たったそれだけで？」

レイラは立ち上がり、剣を掴み渚に斬りかかる

ザンッ！

渚はまともにレイラの一閃を受ける

「じゃあ、守って見せてよ」

渚は倒れる、腹部から流れ出る鮮血

「ほら、守れないじゃない」

レイラは剣先を渚の喉許に向ける

「確かに俺一人じゃ、守れないでもゼロと言う相棒が居る。後は頼んだぜ、ゼロ」

「おう！任せな」

そこで渚の意識が途絶えた。

「レイラ！ここからは俺が相手だ！」

ゼロは白く輝き始め剣から本来の真の姿に具現化する。ドラゴンに・

「へっ！どうだレイラこれが俺の姿だ」

白い翼に強靱な体躯、鋭い爪、全長は10メートルほどはある

「そんなの！」

レイラは虚無の弾丸を放つ、何十いや何百も

ゼロは翼を盾にただ立ち尽くす。

そして撃ちきった頃によくやくゼロは口を開いた。

「今度こっちの番だぜ！」

ゼロは翼を羽ばたかせ、飛翔する。

「ゼロ・パニッシュ」

ゼロのは叫び、白く輝く衝撃波がレイラを襲う

「私の負けか、守り抜いて見せなさい。一ノ瀬渚」

その言葉を最後にレイラの姿が消えた。

「ふあゝ俺も疲れたな」

ゼロは地上に降り立ち、渚の体を持って宮殿を後にする

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「・・・ろ渚、お・・・な・・・さ」

さつきから誰かが体を揺すっている。

「いい加減起きろ！」

「うわっ！」

ゼロは大声で渚を起こし、渚は飛び起きた。

「ゼロか・・・」

「あれっ、灯お嬢がよかったか？」

頭を抑え答える

「いや、別にここはどこだ？」

「レイラが消滅した事でレイラが支配していたエリアの魔界が消え

ようとしてるんだ。まあ、簡単にいうなら崩壊し始めてるって事だ」

「そうか」と渚は納得した。

「ゼロ、お前の姿を見るのは久しぶりだな」

まだゼロはドラゴンの姿のまま

「契約して以来だったな」

「お前ってがさつだけドラゴンになるとキレイだよな」

ゼロの翼は白く輝いている。まるで野に咲く花のように
そして地震が起きた。

ズドドドド！

「ちっ！もう時間がないぜ渚」

「どうせ帰れないんだ、このままゆっくりしてようぜ」

「じゃあ、最後なんか叫ぼうぜお互い」

「そうだな、じゃあゼロから」

ゼロは一拍置いて高く叫んだ。

「渚！お前は最高のパートナーだ！」

渚は一回深呼吸して叫んだ

「灯い！約束守れなくてごめん！」

そして魔界は消滅した。

「さてこれで1つの物語が終わった訳だ」

大きい書物を抱える少年

「次は終了悟、君の番だよ」

第一部 END

第七話、決着（後書き）

いかがでしたか？第一部はこれで最後です。
次回から第二部に突入します。
主人公は終了悟です。

第八話、ハジマリ（前書き）

第二部の始まりです。

主人公も渚から了悟に変わります。

第八話、ハジマリ

渚と魔王レイラの戦いから三ヶ月経った。そして新たな平和が訪れた。

柊了悟は公園にいた。

この公園は三ヶ月前に謎の事件でほとんどの遊具が壊されて、あるのはブランコとベンチぐらい
そのベンチに了悟は座っていた。

「はあ、今日も疲れたな」

ちようど了悟は一息ついていたところ

「そうなのか？」

右手に着いている黒いブレスレット「アイン」が聞く

「お前はまだこっちに来て、浅いからわからないんだよ」

「そうか」

アインもドラゴンだが右手のブレスレットに姿を変えている

「おーい、了悟」

一人の少女が了悟を呼ぶ、了悟は軽く手を振る

「よっ！白河」

ゴッソ！

少女・白河かぐやは出会いがしらに了悟の頭を殴る

「痛！」

「名前で呼んでって言ったでしょ」

「あー悪い、つい癖で」

殴られた頭を擦って、謝る

「で、かぐやはなんで来たのさ？」

「べ、別にいいじゃないねえアイン？」

そう言っ了悟の右手のブレスレットを見つめる

「いきなり振られても」

戸惑うアイン

「おいおい、やめろまだアインは日が浅いから」

苦笑する了悟、かぐやは笑っている

「もう了悟はドラゴンナイトになってから三ヶ月経つんだ」

「そう・・・だね」

かぐやの表情は悲しげだ。

了悟がドラゴンナイトになった理由それは力がほしいただそれだけだった。

勉強はできるし、スポーツ万能とも言われているが友達が居ない、だがかぐやだけは他人と違い普通に接してくれた。そんな彼女を守りたい一心でアインと契約した。最初のかぐやも反対したが認めてくれた。

「さあて帰ろ」

「うん」

二人で公園を出ようとした時、大地が揺れた。

ドスン！

「アイン、これって」

「モンスターだ」

二人は後ろに振り向いた。そこには大地を揺らした主、ゴーレムがいた。

「了悟」

怯えて了悟の背中に隠れるかぐや

「大丈夫、アイン行くよ」

「ああ」

「我が漆黒の刃、黒き龍その名はアイン」

了悟が叫ぶと、右手の黒いブレスレットが輝き、剣へと姿を変える
「うおおおおお！」

剣を構え、ゴーレムに向かって駆け抜ける

キーン！

ゴーレムは容易く剣を弾く

「効いてない？」

「駄目だよ、邪魔しちゃ」

大きな書物を抱えた少年、それと対峙するマントを羽織った渚

「どけ！魔王は俺が倒すんだ！」

渚は叫ぶ、だが少年は笑っている

「だから、これは終了悟の物語。君の物語は終わったの」

「物語？」

「いづれ分かるよ、それまで君はこの世界から追放させてもらうよ」
書物を抱えた少年は指先から黒い光を放つ

「なにっ！」

一瞬で渚は消えた。

「さて、終了悟がんばって」

「てやああああっ！」

さっきから何度も剣でゴーレムを斬り倒そうとするが傷1つつかない
「アイン、どうなってるんだ？」

「確かゴーレムに弱点があったはず・・・」

ゴーレムの拳を逆袈裟に構え、受け止める

「それ早く言え」

「ご、ごめん」

取り合えず弱点を探す為、距離を離す。

そして剣を構え、接近しようとした時

バンッ！

黄色い閃光がゴーレムの目を貫いた。

「・・・任務完了」

アスカが呟いた。アスカはゆっくりと了悟に近づくと了悟が身構える

「・・・大丈夫・・・敵じゃない」

了悟は警戒を解き、かぐやを呼んだ

「君は？」

了悟は剣をブレスレットに戻し、アスカにたずねた。

「・・・アスカ」

「アスカ？」

「・・・そう」

なんか調子が狂う。

「どうしてこんなところに？」

「・・・モンスターが居たから」

「俺が居たのに？」

「・・・頼りない」

今、なんか酷い事言われたような

横ではかぐやが腹を抱えて笑っている

「だってさ、アイン」

「俺に振られても」

「さあ、もう1つの物語の始まりだよ」
少年は消えた。

第九話、敗北

今日も了悟はいつも通りかぐやと一緒に登校している。

クラスのみんなは騒いでいる。そして先生が来ると落ち着く、大抵学校ではそんな感じだ。

「これから授業を始める。柊、出て行っていぞ」

「そうさせてもらいます。」

了悟は天才が故に授業を追い出される。そしていつも向かうのは屋上
「おっ！やっぱり居たか」

了悟に続いて一人の白衣を着た男が入ってくる。

「川島先生・・・」

「呼び捨てでいいって言っただろ」

「そうでした。」

川島は理科教師で数少ない了悟の理解者だ。

「ほら！飲め」

川島は缶ジュースを了悟に渡す。

「ありがとう」

「また追い出されたか」

「はい」

これでいつも会話が始まる。

「天才ってのはつらいか？」

「はい、でもある人のおかげで馴れました。」

「かぐやちゃん？」

「は、はいつて生徒の事ちゃん付け」

「はっはっは、いいじゃんか別に俺とお前しかいないだろ」

ここでお互いに愚痴をもらす。（もらしているのは川島だが）

でも了悟にとって気が許せる場所

「さあてそろそろ、戻るかな」

川島は残っている缶ジュースを一気に飲み干し、その辺に投げ捨て

る。

「どんなつらくても負けるなよ」

その言葉を最後に川島は階段で下に降りて行った。

「負けるな・・・か、アインどう思う？」

「分かんないさ、まだ人間の事なんて」

「だよなあ」

呆然と空を見上げる。

「おい、了悟く授業終わったから帰ろ」

かぐやが階段から上ってきた。

「ああ、分かった。」

了悟も立ち上がり、かぐやの許へ急ぐ

「相変わらずキレイだなその蒼い髪」

「えっ？そうかな」

かぐやは自分の髪を触って確かめてる。

「ほらっ、行くぞ」

軽く肩を叩いて、階段を下りていく

ちょうど校門を出ようとした時だった。

「なっ！モンスター？」

2メートルは軽く超える体軀にワニのような風貌、戦斧

「なんで、アイン気づかない」

「感じなかったんだ」

「ちっ！かぐや離れて」

「う、うん」

怯えながらもかぐやは離れていく

「守って見せる、かぐやも全部」

そして了悟は叫んだ。

「我が漆黒の刃、黒き龍その名はアイン」

ブレスレットは旋風を起こしながら剣に姿を変える。

「行くぞ、アイン」

「ああ」

「このオオワッシャ様に齒向かうとは」

了悟は間合いを一気に詰め、一太刀入れる
ズバッ！

「こんなものか！」

そう言つてオオワッシャが了悟目掛けて戦斧を振るう
ガッン！

了悟は剣で防ごうとしたが剣もろとも吹き飛んだ。

「うわあああっ！」

「了悟！」

影で見ていたかぐやが飛び出した。

「だめだ！かぐや！」

叫んだが遅かった。

「この女、魔王様に言われた女に似ている。」

「い、いや」

怯えるかぐや、だが無情にも連れ去られる。

「くそっ、動け」

「やめろ、了悟！無理に動かすな！」

「黙ってろ！アイン！」

オオワッシャはその場から去ろうとしたが

「おっと、忘れるところだった。」

そう言つて一枚の紙を投げ渡す。そしてその場から消えた。

「くそおおおおっ！」

この時、了悟は思い知った。実力を・・・

第十話、決意（前書き）

今回は少し短めです。

第十話、決意

「アイン、あれから何時間経った。」

「4時間」

辺りは闇に覆われ、了悟を追い詰めるように降り注ぐ雨
了悟はオオワツシャに負けてからずっと倒れたままにいる

「お前、こんなところで何やってるんだ？」

偶然通りかかった川島が傘を差し、了悟に気づく

「川島せんせ・・・じゃなかった、川島」

「こんな濡れやがって、どうしたんだ？」

「自分に絶望してたところです。」

淡々と答える了悟に川島は少し動揺した。

「ほら、これお前のだろ？」

一枚の紙、これはオオワツシャが了悟に宛てたもの

了悟は読んでいない

「読まなくていいのか？」

差し出される一枚の紙、了悟は何度も読もうとしたが読まなかった。
ちがう読めなかった。読もうとすると敗北感が襲う、だから読む勇
気が出なかった。

かぐやを助ける方法が書いてあっても読まなかった。

「俺にそんな資格ありません」

バシッ！

川島が了悟の頬を叩いた。

「資格がない？ ふざけんな天才がたかが喧嘩で負けたぐらいで絶望
してんじゃないよ！ 絶望する暇があるなら行動しろ！ 行動」

川島は無理矢理、紙を持たせその場を去った。

「アイン、ごめん俺、間違ってた。」

「そうか」

了悟は紙を広げ書いてある文を読んだ。

内容は南にある教会に來いとの事、日時は明日になっている。

「アイン、俺はかぐやを助けたい、だから力を貸してくれ」

「いいに決まってるだろ」

了悟は新たにかぐやを助けることを決意した。

「オオワツシャ、ご苦労様」

教会内部は闇で包まれている。

「はっ！魔王様」

「明日は決戦日だからね」

「承知しています。では」

オオワツシャはその場から消えた。

「さあ、了悟、勝負と行こうじゃないか」

白衣を着た男の笑い声が響いた。

第十一話 真実

翌日

昨日から雨は降り止まず、今も尚降り続いている。

「アイン、行くぞ」

「分かってる」

南にある教会に行くには橋を超える必要がある。その為行くには時間がかかる

そして自分の家から外へ出る。すると二人の人物が立っていた。

「君だね、魔王を倒しに行くのは」

一人は青年、もう一人はアスカだ。

「あなたは？」

「紹介が遅れたね、僕は朝倉真君と同じドラゴンナイトだよ」

真は手を差し出す。

「僕は終了悟です」

お互いに握手する。それを横で見ているアスカ

「ほら、アスカちゃんも」

「・・・よろしく」

三人で教会へ向かう事になった。

その途中

「了悟くん、君は誰かを救うために戦うのかい？」

「はい」

「なら、ちゃんと自分の身も守りなよ」

どうしてこんな事を言うのだろうと了悟は考えたがすぐにやめた。

「僕は知ってるんだ。大切な人は守れたのに自分が助からなかった人を」

今の真の一言ですべてが理解できた。

そして教会の前、すでにオオワッシャが待ち構えていた。

そしてほかにもガーゴイルの軍勢が・・・

「ガーゴイルは僕に任せて、二人はあのリーダー格を」

「・・・分かった。」

アスカは構えるが既に了悟は前に出て、オオワツシャに斬りかかる

「人間！少しは強くなったか？」

「さあな！」

了悟の「アインセイバー」とオオワツシャの戦斧がぶつかる

「はあっ！」

了悟は戦斧を弾きかえし、懐に入り込むそして・・・

「うおおおおっ！」

ズバツ！

オオワツシャの心臓を貫いた。だが・・・

「きかねーな」

オオワツシャは了悟を驚掴みにする

「このまま潰してやるよ！」

次第に腕に力を込める

「うわあああっ！」

思わず了悟は悲鳴をあげてしまう

「・・・ライ、準備」

「了解」

アスカはライフルを構え、標準をあわせる

「・・・電龍バレット」

電気のできた弾丸が了悟を握っている腕に直撃する

ズドン！

「はあ・・・はあ・・・」

了悟は立ち上がり、アスカの横に並ぶ

「・・・真の忠告ちゃんと聞く」

「ごめん」

了悟は剣を構える、アスカも身構える

「・・・私が牽制する、その内々に接近して」

「分かった、いいな？アイン」

「ああ」

アスカがオオワッシャ目掛けてライフルを連射、その内に了悟が間合いを詰める

「心臓が駄目なら頭だ」

懷に潜りこみ、跳躍そしてオオワッシャの頭部に剣を突き刺す

「うおおおおおおお」

ドスン！

断末魔をあげながら、二メートルの体躯を持つオオワッシャが倒れた。

「やった」

「・・・任務完了」

渚はすぐに教会のドアを開け、急いで中に入る。奥には純白のドレスを着せられているかぐやがいた。

「かぐや！」

叫んで見るも、反応なしどうやら眠っているようだ

そして慎重に一步づつ近づいていくが突然、弾丸が了悟の頬を掠った。

バン！

「くっ！」

反応できなかった。

「やっと来たか、了悟」

了悟は顔を見上げた。白衣を着た一人の男

「川島」

了悟が言った。

「待ちくたびれたよ、了悟」

「どうして？」

「どうして？そんなの決まってるじゃないか、俺が魔王なんだよ」

了悟が体勢を立て直して、剣を構える。

「なんで？なんであんたが魔王なんだ」

そして斬りかかる。寸前の所で川島が銃を構える。

「くっ！」

一度退き、再び剣を構える。

「なんで魔王？俺が知りたいぐらいさ！」

銃を乱射、剣を逆袈裟に構えて、弾丸を弾く

「俺は十年前に死んだ。だが訳の分からない奴に蘇らされて戦えて言われたんだ！」

「死んだ？あんたが？」

「そうさ、でも奴は言った終了悟って奴を殺せば人間にしてやるって」

川島は了悟の剣を蹴り飛ばして、銃口を突きつける。

「さようなら、終了悟」

バンッ！

第十一話 真実（後書き）

ここで柊了悟のプロフィール書いときます。

第二部主人公

柊了悟

身長163

体重45

年齢15

普通に接してくれるかぐやを守りたい一心でアインと契約した。ま

だ新米のドラゴンナイト

好きなもの かぐや、アイン

嫌いなもの 自分と自分の才能

第十二話 成功

バンッ！

了悟に向かって放たれた弾丸だが・・・

「えっ？」

「くっ！」

真が了悟を突き飛ばした。そして弾丸を真が受けた。

「ちっ！邪魔が入ったか」

川島は銃を逆手にトンファーのように持ち、真を殴り飛ばす。

「真！」

アスカはライフルを投げ捨て、真の許へ向かう。真は左肩から血を流していた。

「大丈夫だよ、アスカちゃん」

「そんな事ない」

アスカの瞳から雫がこぼれ落ちる。

「二人仲良く逝っちまいな」

二人に銃を向ける川島

「させるかあああっ！」

了悟は剣を持って斬りかかる。

「やっと本気になったか」

満足気に呟く川島

「さあ、決着をつけようぜ了悟」

「ああ」

体勢を立て直し、剣を構える。川島も銃を構える

「死んじまえ！」

「お前は俺が倒す」

間合いを詰め、斬りかかる。川島も銃をトンファーのように持ち白兵戦に以降する。

「はあああっ！」

剣を横薙ぎに振り、そして川島の手を一蹴し片方の銃を蹴り飛ばす。
「うおおおっ！」

蹴り飛ばした銃を掴み、川島に向けて連射
「ぐっ！」

了悟が撃った弾丸は左足に命中、すぐさま接近して川島の右腕を貫いた。

だが川島は余裕の笑みを浮かべている。

「甘いんだよ、ばーか」

バンッ！

一発の弾丸が了悟を貫いた。

「がっ！」

ボタン！

その場に倒れる了悟、それをあざ笑う川島

（くそっ、今の弾丸はどこから）

川島の白衣の左腕から煙が上がっている。

「言ったろ？俺は人間じゃないって」

そう言って白衣を投げ捨てる。左腕が銃に改造されていた。

了悟の意識が途絶えそうになった時だった。

「了悟！しっかりしろ！かぐやを救うんだろ？」

アインが怒鳴った。了悟は剣を支えに立ち上がる

「こっちに来て日が浅い癖に生意気言ってるじゃねーよ」

そして川島に向かって剣を構える。川島も左の銃を構える

「勝負」

川島と了悟が同時に叫んだ。その言葉を合図に了悟は一步を踏み出した。

「てやああああっ！」

川島は銃を了悟目掛けて連射するが了悟の勢いは止まらない、それどころか加速していく

どんなに銃弾を浴びてもいい、こいつだけは俺が倒す。そしてかぐやを助ける。

執念の強さとも言うべきか、銃弾を浴びても倒れずに川島の目の前に立ち剣を突き刺した。

「がはっ！」

川島は心臓を容赦なく貫かれた。そしてそのまま倒れる了悟、川島はそれを支えた。

「俺を倒しても騎士は姫の所に行かないと駄目だろ？」

「ああ」

そして一歩づつ歩み、ついにかぐやの許へたどり着いた。

「かぐや助けに来たよ」

ドサッ！

そこで完全に了悟の意識が途絶えた。

「それでこそ、天才だよ。じゃーな」

続けて川島が消えた。

「アスカちゃん、早く救急車を」

「はい」

こうして了悟はかぐやを救い出す事に成功した。

第十二話 成功（後書き）

次で第二部はクライマックスです。

第十三話 未来へ（前書き）

第二部はこれで最後です。

第十三話、未来へ

あれから一週間・・・

救急車が来て、了悟達は運ばれた。無事だったのはアスカとかぐやの二名

真は肩に銃弾を受け、全治一ヶ月。

了悟は全身に銃弾を受けたり吹き飛ばされたりして完治するのに半年はかかる。

そして聞いた、一ノ瀬渚と言う少年がいた事を、そして彼は大切な人を助けられたが自分は魔王と決着を着ける為、魔界に残り魔界と共に消滅した事

「そうなんですか」

「そうそう、了悟君の剣は渚君の剣に似てるんだよね」

「だってさ、アイン」

右手のブレスレットに話かける。

「もしかして渚って奴が契約してたドラゴンでゼロじゃないか？」

アインが真に尋ねた。

「よく分かったね、その通りだよ」

「やっぱりな」

アインは感慨深そうに納得した。

「お前となんか関係あんのか？」

「まあな」

「おいおい教えろよ」

了悟は黒いブレスレットを揺らす。その時だガシャン！

勢いよくドアが開けられた。入ってきたのはかぐやとアスカ

「・・・次の任務」

アスカの第一声

「ちよつとアスカちゃん、僕怪我人だよ」

「・・・問題ない」

そう言って真の袖を掴んで引きづり出す

「あゝれゝ」と叫びながら真は消えた。

「あはは、調子がどう了悟」

「まだ痛むけど大丈夫だよ」

そう言って体を動かす。

「守ってくれてありがとね」

突然の感謝の言葉、了悟はため息を吐きながら言った。

「どうしてお礼なんて言うのさ、アインと契約する時言ったでしょ？俺はかぐやを守るって、たとえこの身が朽ち果てようと」

かぐやは了悟に抱きついた。

「ありがとう、了悟これからも私を守ってね？」

「分かりました。」

「さあ、これで2つの物語が終わった訳だ」

大きな書物を抱えた少年は呟いた。

「さあ、次も見せてくれ物語りを」

第二部 E N D

第十三話 未来へ（後書き）

第三部からまた主人公が変わります。

第十四話、物語（前書き）

第三部の始動です。とりあえず見てください

第十四話、物語

「君もしつこいね、ほんと」

大きな書物を抱えた少年と対峙する渚

「しかも時空に追放したのにさ、時空斬りを習得しちゃってさ」
剣をただ構える、渚

「言いたい事はそれだけか？」

静かに呟く、殺気を込めて睨む

「うーん、そうだねこれから始まる新たな物語を見物してろって言いたいね」

疑問を持つ事ばかり言う

「物語って何だよ！」

怒気を込めて叫ぶ、だが少年は微動だにしない

「いずれ分かるよ」

そう言って姿を消した。

「くそっ！ゼロ感じるか？」

「いや、無理だ」

まだみんなに会う訳にはいかない

「物語ってなんなんだよおおっ！」

渚の叫びがこだました。

「困りましたね。」

少年・工藤命くどうみことは不良に囲まれていた。

「兄ちゃんよ、金よこせよ」

「金くれたら何もしないからよお」

不良は鉄パイプやら何やらを持っている

「やっちまえよ、命」

左手の青色のブレスレットがしゃべる

「ツヴァイは黙ってください、僕は暴力は嫌いなんです。」

「さつきから何一人でしゃべってんだよ」

不良の一人が我慢の限界のようだ。命はため息を吐く

「仕方ありませんね」

命は動くや否や一番近い不良を殴り飛ばす。

「これ以上やるなら容赦はしません」

不良は命の強さを見て逃げ出した。

「ふう」

不良を追い払って安堵する命だがツヴァイは許さなかった。

「なんであそこで逃がすかなあ」

「僕は暴力が嫌いです。」

路地裏から出た時ちようど幼馴染の雪村あげはと遭遇した。

「あれ？命こんなところで何してるの？」

少し驚いていたが無理もない命が居るのは商店街の路地裏

命は普段は人と接するのが苦手なため外出は控えめで人が多い商店

街には滅多にこない

「聞いてくれよあげは、こいつ不良に絡まれてさ」

ツヴァイが言った。なんて事を・・・知られたくなかったのに

「え！逃がした？」

「そうなんだよ。雪村流剣術でこいつ鍛えなおしてくれないか？」

「暴力で解決したって何にもなりません」

命は声を大にして言った。呆氣にとられるあげはとツヴァイ

「でもその考えかたはいいけど、たまにはお返ししないと」

「あげはの言う通りだぜ」

「では、早速戦いましょうか」

「「え？」」

気づけば辺りに人はいない、これはモンスター出現の予兆なようなもの

あげははすぐさま命の後ろに隠れる

「行きますよ、ツヴァイ」

一度深呼吸をして、手を掲げ叫んだ。

「我が蒼白の刃、蒼き龍その名はツヴァイ」

蒼い旋風を巻き起こしながら、ブレスレットが剣に姿を変える
そして命の前に現れたのは三つ首の地獄の番犬ケルベロス

「では」

一瞬で間合いを詰め、三つ首の1つを斬り落とす。

「1つ目」

そして跳躍し、ケルベロスの体躯を貫く

ブサッ！

溢れでる黒い鮮血、命はそれを浴びながらも剣を突き刺す。

「グエツエエエ」

ケルベロスの断末魔を聞いて命は剣を抜いた。

「ふう〜今日はついてませんね」

剣をブレスレットに変えて、あげはの許へ急ぐ

「遅れました。」

「ううん、そんな事ないけど・・・戦えば強いのになんで戦うのが嫌いなのか？」

「さっきも言いましたが暴力では何も解決しません」

左手のブレスレットを見て言った。

「でも、確かに力を使うのもいいかもしれません」

二人は並んで帰った。

第十五話、優しさを捨てろ！

「ただいま」

「ただいま戻りました。」

命は雪村家に居候させてもらっている。そのため帰るのは雪村家である。

「おかえりなさい、二人共」

出迎えてくれるのはあげはの父であり、命の義父である雪村郷ゆきむらこう

あげはの母はあげはが小さい頃に亡くなった。命を引き取ったのもあげはの母である。

「命君、後で道場に来てくれないかい？ 話があるんだ。」

郷は重要な話は必ずと言って良いほど道場で伝える。その意図を感じた命は「はい」と頷いた。

「話って何だろうね」

あげはが不思議そうな表情で呟いた。

「よほど、重要な話なんでしょうツヴァイは黙っててくださいね」

「へいへい」

そして夕飯を食べ終わり、道場に向かう事にした。

「話とは何でしょうか？」

命は郷と向き合って呟いた。ものすごい威圧感、座っているだけで感じられた。

「君、今日不良を逃したそうじゃないか」

「はい」

どうしてそんな事を知っているのかはさほど不思議に思わなかった。例えここで嘘をついたとしてもすぐに見破られる。命にとって郷は父であり師でもある。そんな人に嘘を言っても仕方ない

「どうして逃したのかな？」

何の感情も込められてない言葉、どうやら怒ってはいないようだ。「僕は暴力で解決するのは嫌いです。それ故に下した決断です。」

命は平然と答えた、嘘偽りのない言葉

「確かに君の判断は間違えじゃない、でもそんな考え方ではいずれ大きな戦いが起きた時誰も守れないのではないかな？」

郷の言っている事も間違えではない、それは命も分かっている

「それでも僕は人間に暴力を振るうのは認めない、それに力もあまり使いません」

命の強い意志の現れ、郷は表情を変えずただ聞くだけ

「君は優しすぎるんだね、でもいずれはその優しさを切り捨てなければならぬそれだけは覚悟しておいてくれ」

命は何も言わず、無言で頷いた。

「最後に・・・あげはをよろしく」

郷は立ち上がり道場を後にした。そして一人佇む命

「ツヴァイ、僕は優しすぎるかい？」

「ああ、お前は優しすぎるだからあのじーさん言ってる事は正しいと思うぜ」

「そう・・・ですか」

少し落ち込み気味の命、その時だった聞き覚えの声の悲鳴がしたのは「きやややつ」

命はすぐさま悲鳴の方へと急いだ。悲鳴は玄関の方からした。

「あげは！」

「命」

「さあ、早く逃げて！」

「う、うん」

あげはは急いで命の後ろへと逃げた。

「やれやれ、邪魔が入るとは」

命の眼前には二メートルほどの体躯、サイのような風貌に体躯に負けないぐらいの長い金棒のモンスターがいる

「人間、邪魔だ！そこをどけ」

誰でもが感じられるほどの殺気、普通の人間なら逃げ出すだろう・・・

「お断りします。貴方こそこの場から立ち去りなさい！」
声を大にして命は言った。モンスターは金棒を向ける。

「人間、いい度胸だ。ここじゃ狭い外にでろ！」

モンスターはそのまま外へ出る

「行きますよ、ツヴァイ」

「ちょっと待ちな！」

「なんです？」

「お前、ほんとにいいのか？」

「何をですか？」

「なんでもない」

ツヴァイとの会話を終え、外に出る

「我が蒼白の刃、蒼き龍その名はツヴァイ」

命は剣を構え、モンスターの反対側に立つ

「俺はゴザレス、お前は？」

「命・・・工藤命です。」

「命か・・・いい名だ、行くぞ」

「どうぞ」

ゴザレスは一瞬で間合いを詰め、金棒を振る

キーン！

「くっ！」

剣を逆袈裟に構え、受け止める。

「はっ！」

ザシッ！

金棒を弾き返し一太刀入れる

「ふん、この程度か？」

「なっ！」

命が放った一太刀は浅かった。ゴザレスが一瞬で太刀筋をずらしたのだ。

「命！今だけは優しさを捨てろ！」

「優しさ？」

そのとき郷の言葉が命の中で響いた。

（君は優しすぎるんだね）

「そんな事、僕にはできない」

「もらあったあ！」

ズドン！

ゴザレスの金棒の一突きが容赦なく命の肩に直撃した。

「なんだ、この程度か殺すかな」

ゴザレスは命の首を掴む

「なんか言い残す事は？」

命は黙ったまま、何の反応もしない

「命、何やってんだ」

ツヴァイは命に向かって叫んだ。だが人形のように反応がない

「ちっ、こんな奴殺しても仕方ないな」

ゴザレスはごみのように命を投げ捨てる。

「次までには強くなってるよ」

ゴザレスは金棒を持って消えた・・・

第十六話、渚が参戦（前書き）

この話では第一部の主人公、渚が少し戦います。

第十六話 渚が参戦

終わった・・・

命はそう思った。

どうして？

ゴザレスの破壊の一撃、それで左の肩が潰された。そして気がついた。

自分は優しいんじゃない弱いだけなんだってでももう終わりだ。

ツヴァイになんて言おう？あげにはなんて言う？

そうか・・・考える必要ないんだ。どうせ死ぬんだから

「命・・・命！」

あげはが呼んでる。

「命！早く起きろよ！」

ツヴァイも呼んでる。

「いい加減に・・・しなさい」

バチン！

あげはは命の頬を叩いた。

「うっ！」

命は飛び起きた。

「あれっ！あげは？どうしてここに？」

「どうしてってここに倒れていたんじゃない」

「そう・・・ですか」

「それより左肩、大丈夫？」

左肩、そうだゴザレスにやられたんだ

「ちよっとつらいです・・・でもこんな程度、大丈夫です」

命は左肩を押さえながら立ち上がる。

「どこいくの？」

「すぐ帰って来ます。だから少し待っててください」

素晴らしい残して命はある場所に向かった。

「やあ、命君どうしたんだ？」

命が向かったのはある神社

ここに來た理由はある人に会うため

それは大きな書物を持った少年

「僕を・・・僕を一週間で強くしてください」

「うーん、いいけどその肩で大丈夫？」

書物を抱えた少年は命の肩を指差した。

「こんな怪我・・・大丈夫です。」

「分かった、あっちで待っていてくれる？」

「はい」

命は指定された場所へ向かった。

「君もしつこいね、一ノ瀬渚今は命君の物語の途中だよ？」

「関係ねえ、お前を倒せれば」

渚はゼロカリバーを構える。

「なんでかな、せつかくこの後の物語のために力を貸してあげよう
としてるのに」

「力を貸す？お前が？」

「そうだよ、どうせ君だけじゃ僕は倒せないし」

「じゃあ、なんで力を貸す？」

「さあね、気まぐれかな」

「お前の事信じるからな」

そのまま渚は消え去った。

「さあて、命君の所に行こうか」

神社の裏にある滝

命はそこで立って居た。

「ごめんね、待たせて」

「では僕を強くしてください」

「そうだね、じゃあまず」

ゆっくり指を滝に向ける。

「あの滝を逆流させて」

「分かりました。行きますよツヴァイ」

命は剣を召喚して滝に向かって剣を振るう

「さあ、がんばってね早く物語りを終わらせる為に」

命に聞こえないように書物を抱え呟いた。

その頃あげはは・・・

「またねえ」

友達と別れ帰路に着いていた。だがその道中・・・

「こいつが雪村あげはか・・・」

あげはの前にゴザレスが立ちはだかる

「い、いや」

怯えるあげは、ゴザレスは問答無用にあげはを掴もうとする。

その瞬間、ゴザレスの腕が切断された。黒い血が辺りに吹き出る

「ぐううう」

その男は剣を担いだ。

「ちっ、こんな程度の相手に何手間取ってるんだよ」

ゴザレスの腕を切断したのは渚だった。

「まだ、ゼダンの方が強いぜ」

そう言うとゴザレスが反応した。

「お前がゼダンを倒したのか？」

「ああ、そうだよ」

渚は平然と答えた。

「貴様！許さんぞ！」

ゴザレスは渚との間合いを詰め、片手で金棒を振った。

「ゼロ、頼むぜ」

「おうよ！」

渚の持つ剣・ゼロカリバーが淡い光を解き放ち一瞬でゴザレスを飲み込む

「がああああ！」

ゴザレスは断末魔を上げ、金棒を残して消えた・・・

「あーあ、無駄な力使った」

ゼロを突き刺して渚はその場に倒れこむ。

「あ、あの」

あげはは遠慮気に渚に話かける

「何？」

「その力、命と同じですよね？」

「命？ あゝあいつなら神社に居るよ」

「あっありがとうございます」

あげはは渚に一礼して家急いだ

「なあ、渚ほんとにこんな事していいのか？」

ゼロは戸惑いながらも尋ねる

「分かってるだから俺らがやれるのはここまでだ、本命を倒すのは命って奴だ」

渚は空を呆然と眺め答えた。

第十六話 渚が参戦（後書き）

ちよつと話が浮かばないのでしばらく間を空けるかも知れません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8498d/>

ドラゴンナイト

2010年10月12日07時06分発行